

あぶらむ通信

第33号 2011年12月 あぶらむの会発行
〒509-4121 岐阜県高山市国府町宇津江3225-1
TEL 0577-72-4219 FAX 0577-72-4494
E-mail: abram@hidatakayama.ne.jp



韓国で見つけた土人形
オオゴウ・イク：絵

飛騨便り

西暦2011年3月11日午後2時46分、自分が生きている間にこのような光景を目にしようとは想像もしなかった。人類への警鐘なのか、頭から灰をかぶり己が罪を懺悔するしかありません。犠牲者のご冥福を祈ると共に被災された方々へのお見舞いと共に一日も早い復興を祈ります。

日本のみならず世界的にも大変な一年間でしたが、あぶらむ通信お手の皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。いつもながら当会への多大なご支援に心より感謝し、お礼申し上げます。

●あぶらむの会、一般社団法人に

1986年、あぶらむの会が当地に産声をあげて25年経ちました。忘れてはいけないこと多々あるはずなのに四半世紀という時間の経過と私の老化でずいぶんの事記憶が薄れてしまいました。ただあぶらむの会設立への私たちのささやかな志とそれを支援して下さった多くの方々の事だけは決して忘れることはありません。

設立当時は現在のようなNPO法人もなく、ないない尽くしのあぶらむとしては“人格”の有り様がありませんでした。高山税務署に直訴して“権利なき法人(みなし法人)”として扱うという口約束は取り付けたものの、この世的にはあぶらむはオオゴウ個人商店のようなものでした。

多くの方々のご支援で得たこの土地もあぶらむに法人格がないために大郷個人名義での登記、あぶらむの働きのためにと寄せられた寄付も法律的には個人への贈与となる等々…、これらの事がずーっと私の中での悩み、課題でした。

当初、NPO法人(特定非営利活動法人)を目指していたのですが、当会の実情を踏まえいろいろと検討を重ねた結果、「一般社団法人」がふさわしいということになりました。現在の実践教育活動や家庭裁判所の補導委託事業等の実績をさらに重ね、将来的に「公益社団法人」として成長していくこともふまえ、この「一般社団法人」からスタートすることとなりました。

このような法人設立手続き等の事務的能力ゼロの私に替って、「定款」という法人の憲法ともいべき土台の原案を草稿してくれた内閣府勤務の長谷川秀司、弁護士の川上詩朗の両氏にこの紙面を借りて心より感謝、お礼申し上げます。

一般社団法人あぶらむの会の法人手続きは高山の公証人役場の審査にパスし、年内に正式手続き、そして年度末ということもあり法人としての登録手続きは年明け早々にということになりました。2012年からは現状のあぶらむの会はオオゴウ個人商店から脱皮して、「一般社団法人あぶらむの会」となりますのでどうぞよろしくご指導下さいますと共に一層のご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

尚、一般社団法人あぶらむの会の理事会は以下のように構成されました。

代表理事 大郷 博(あぶらむの会代表)

理事 山田益男(国際特許弁理士)

理事 西田邦明(立教大学副総長)

理事 前田晃伸(株ミズホファイナンスグループ名誉顧問)

理事 西村正和(立教小学校教諭) 自然学校のプログラムを一緒に楽しんできました。
理事 大郷 育(あぶらむの会) 子どもたち同士で一緒に楽しそうに遊んでいたことを思
監査 川上詩朗(弁護士, 東京弁護士会所属) なるなぁと感心してしまいます。初めは目
事務局 宮崎秀貴, 下田英一, 川上美砂 すぐに慣れてしまっただけで、私が勤い頃から

●Jr.ジュニア世代の台頭

今年は4年ぶりに再開となったネパールの旅や、昨年のサンティアゴ巡礼の旅から派生した野麦峠越えウォーク&ランなど特筆すべき事多々あったのですが、私にとって一番印象深かったのは、ジュニア世代(立教大学時代の学生だった彼らの子ども達)のお手伝いとしてのあぶらむ登場でした。

大学勤務時代、一緒に沖縄のハンセン病療養所愛楽園やフィリピン、ネパールなどを学びの場として、「生きる」ということを考え合った学生の子ども達が大きく成長して、あぶらむの企画プログラムに参加するだけでなく、夏の陣の戦力としてあぶらむを助けてくれるようになったのです。それもお父さんお母さん顔負けのような働きなので私の嬉しさは倍増でした。

私たち夫婦のゆるやかな老齢化と後継者不在という悩み多い現状の中で、このようなジュニア世代の台頭に大きな希望が湧いてきました。

2011年は私たちが築き上げてきた価値観や世界観などその全てを根底から問いかけた年となりました。私たち一人一人その問いかけにどう応えていくのでしょうか。この深淵な問いに対してあぶらむなりの応答をしていきたく思っています。法人化を機にもう一働きをと考えています。その時はもう一度皆様方のお力をお貸し下さるようお願い致します。

新しい年、本年に受けた大きな傷が少しでも癒やされると共に、皆様の上に大きな平安と祝福がありますようお祈り致します。

どうぞよいクリスマスを、そして新年をお迎え下さい。

2011年12月

あぶらむの会 代表 大郷 博

お願い 眠っているCD、DVDをご寄附下さい

あぶらむの仕事の一つ、家庭裁判所からの補導委託で預り、生活を共にしている少年たちに情操教育の一環として美しい音楽や映像に触れさせたく考えています。

ご家庭で眠っているCDやDVDをご寄附下されば嬉しく思います。
ジャンルは問いません。

陛下、もう全国植樹祭はやめませんか?!

南木曾木材産業株式会社 代表取締役社長 柴原 薫



林業の将来を憂慮する柴原薫さん。手にしているのは、宇宙飛行士・若田光一さんがスペースシャトルに持ち込んだ木製のうちわ。

伐採しなければ 植樹する場所もない

木曾路は、すべて山の中である——と藤村先生が書かれたこの地で、故森殿夫先生（「かがり火」前編集長）に顧問をお願いしていた歴史ある南木曾町林業研究クラブの会長を、私は思うところあって昨年辞めました。組織では自分が感じ続けている閉塞感から抜け出せず、やるべきことを見失いそうだったからです。どういった閉塞感なのか、日本の山の置かれている状況をお話したいと思います。世界規模で見れば、毎年1000万haの森林が消失していますが（2000年

時点39億ha、森林率30%）、日本は反対に木の材積が8000万m³増えています（木はm³の体積で表されます）。これはいかに木を伐っていないか、森林を放置しているかを示しています。

実は、裏山に生えている杉を日本人の手で伐倒すると（長さ3m、直径20cmとして）1本1200円かかるのに、市場価格は300円にしかありません。50〜60年かかって成長してきた杉が、スーパーに並んでいるカボチャと同じ値段なのを何人の日本人が知っているでしょうか？

さらに、その杉を柱にしたら（4寸角として）1本2000円にしかありません。一方、海外から船で運び、港からはトラックで各地の木材センターに運ばれて加工された外材の柱は1本1500円です。では、ここでどっちがいいか考えてみましょう。1本の柱で比べると、日本の杉材は外材の3割増です。こう言われれば、「安いほうがいいわ」と思いたく

るのが、ごく一般的な庶民の感情でしょう。ところが、柱は家を建てるのに使う

わけですが、柱だけを買うわけではありません。家一棟に100本の柱を使ったとして500円×100本＝50000円の違いになります。でも、家一棟建てるには数千円かかりますよね。その中の5万円は断然お得！と言えるほどのものでしょうか？ その上、外材は船、トラックで莫大な化石燃料を消費して運ばれてきます。裏山の杉が落ちたら、その消費はこくわずかで済みます。

それから、ここを知っていたら、植林によって緑を保っているということですが、日本の山はそのほとんどが、植林によって緑を保っているということですが、つまり、成長した木を伐って、苗を植え、森林を更新していくことで健全な山になるのです。大きく成長した木は根を張り、山を支え、たくさん水を蓄えますが、いま話題のCO₂の吸収率は圧倒的に若木が上です。健全な世の中には、人も木も老若男女が必要なのです。

しかしいま、日本の山は伐つても採算が合わず、使われることも少なく、放置され、荒れていく一方なのです。豊かに

現場から
あぶらむの会会員の柴原 薫さんのレポート記事をお届けします。

■南木曾木材産業株式会社
〒399-5302 長野県木曾郡南木曾町吾妻1187
TEL 0264-57-3044 FAX 0264-57-2006
HP:www.nagiso.co.jp E-mail:info@nagiso.co.jp

からです。最近では、超長距離を走るといふことをききなかられた正和さんが、自分と向き合おうと本気になっているというの

野交時のコースは素晴らしいも

女工の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道

の旧道



50~60年かけて成長した樹が、わずか300円。これでは林業は成り立たないし、山の手入れもおそろかになる。

った正和さんと、野

たために歩いた道その

ルは、佳子さんと一

より、誰かが一緒に

見える日本の緑は、実は悲鳴を上げてい

るのです。さあ、先ほどの問題です。柱

は裏山の杉がいいですか？ 外材がいい

ですか？

では、ある植樹祭の話。ある県で3年

前に開催されたふるさとの森づくりの植

樹祭会場には、町民に知らされることな

く伐採された2haの松林跡地が充てられ

ました。町は「マツタイムシの被害が隣

町まで迫り、自衛策として必要な伐採で

あり、有効利用した

と主張しました。確か

に、伐られた赤松は建

築用材になりましたが、

町内で他に伐採された

松林はありません。よ

り隣町に近い林です

ら！1500人の植

樹祭の参加者がバスで

移動し、少し歩くだけ

で行ける会場はそこしかなかったのだ

です。県知事以下、県職員に2時間歩いて

もらえば2haの会場は確保できたかもし

れませんが、町政担当者はそういう判断

はしません。植樹のイベントを実施する

のに、伐採しなければ適当な場所を確保

するのが困難になっているという皮肉な

現象を見せているのです。

戦後始まった全国植樹祭は、戦後の復

興には大きな役割を果たしました。天皇、

皇后両陛下にご臨席を賜って、お手播き、

お手植えが行われるこの行事のおかげで

森林保有率66%、世界第2位の地位まで

日本を押し上げました。

しかし、陛下、もう日本には植樹すべ

き山はないのです。なぜなら、日本の木

は伐られないからです。使われないから

です。植樹祭をやめて、間伐材を、山の

恵みを、有効利用する道を模索する人々

にこそ、陛下の目を向けていただきたい

のです。白樺の木の中を流れる水を集め

ている人、松のカンナクずでたわしやコ

サージュを作っている人、森の腐葉土に

いる酵母を研究している人、枝打ちロボ

ットを開発している人……。

誰にも知られずに陰で日本の山を守る

うとしている人々にこそ光を当て、植え

て、伐つて、使つて、その利益でまた植

える、資源と環境が循環する社会になる

ようお力をお貸しいただきたいのです。

日本の林業に 本当に必要なものは何か

作家のC・W・ニコル氏は、森づくり
に必要なものは人、モノ、金、情報……
いや、一番は「愛」だといわれる。

長野県における林学のスペシャリスト
であり、実践者であられる元信州大学農
学部教授・島田洋路先生は、「人」が行
う林業だから、人を育てねばならないと
の考えで、林業従事者を育てる森林塾を
十数年にわたって開き、チェンソーの使
い方から始まり1年間で戦力になる人材

を育て続けていらした。先生は育てた人
がまた、次の人を教え育てることによつ
てねずみ算式に従事者が増えると思ひ、
とにかくやってみようと思ひ決意した「偉人」
です。

しかし、いまの日本の林業の現場には
最低20万人が必要であるのに、実際は5
万人弱しかいません。木材の市場価格が
昭和30年代前半のレベルにまで落ち込み、
林業従事者の年収が200万円程度では、
せつかく技術を覚えても林業で生計を立
てることはできませんから、従事者は増
えません。ニコル氏の言う「愛」は、林
業の現状を理解している心ある都市住民
が、何もせずに水源の恩恵を受けている
ことのせめてもの罪滅ぼしに、一日山林
ボランティアをするくらいで終わってい
ます。

また、表面しか見ない役人の施策によ
る弊害もあります。かつて北欧の高性能
林業機械を多額の補助金を付けて導入さ
せました。
・スウェーデン、フィンランドの搬出費
用(Ⅱ単価)1300円。
・オーストラリアの搬出費用(Ⅱ単価)
1500円→3900円。
・日本の搬出費用(Ⅱ単価)7000円
→1万5000円。
人手頼みの日本にも機械を入れればこ
れくらい安くなるだろう、と考えたので
しょうか。しかし、地理的条件があまり
にも違います。日本では傾斜度45度も珍

だからこそ、自分の生きるあり様もだらしなくはないかと思ひます。仕事の中でも自分

ハードで危険もつきまとう
林業従事者の年収が約200
万円、これでは山を守る人
がいなくなる。



木材価格は昭和30年代前半のレベルにまで落ち込み、木材よりも、木に生えるきのこの販売高のほうが多くなってしまった。

しくない急傾斜地が大変多くあります。オーストラリアも比較的急傾斜地があるところですが、日本ほどではありません。まして北欧は緩やかな傾斜地です。そんなところで開発された機械は、日本の山では正常に働けません。すぐにひっくり返るし、効率も悪くなります。今では「機械のお墓」になっています。

それなら、日本用の機械を開発すればいいと思われるでしょうが、需要の少ない分野には最先端の技術も一流メーカーも参入してこないのが、市場原理です。どれほど少ないかというと、林業のGNPは3600億円、これに対してきこのきは3800億円。元は木に生えていたきのこより、木は売れていないのです。

また「山抜け」という言葉をご存じでしょうか。手入れをされない森林は木が密集して、日が差さなくなり、下草も生えず木の根も浅くなり、ひとたび大雨が降れば表土がはげ落ち、土砂が木々をなぎ倒しながらごっそり流れ落ちて、「山が抜けて」しまうのです。「山抜け」すると数十年、いや百年は戻らないとさえ言われています。

2004年には3400億円もの林業災害被害があり、過去10年間で最悪の被害となつて、その面積は53haでした。売り上げと被害がほぼ同じということ。日本で持続的利用が可能な資源は森林と水だけなのにもかかわらず、人も愛もなままに放置されているのがいまの日

本の林業です。時々、思い出したようにマスコミで林業が取り上げられますが、その報道は一面的なものが多く、必ずしも正確とはいえないのも問題です。

そういう日本の現状を察知してか、森林を安く買いたたこうと中国の人たちが狙っているというわさも後を絶ちません。三重県や長野県の山奥では、彼らが高齢の山林保有者をひそかに訪ねているらしいのです。

私が考える日本の林業を守るために、次のことを提案したいと思ひます。

①本の神社仏閣が地元の杉、松、檜、松を使って建造物を建立する愛を發揮していただきたいのです。節がなく見栄えの良い外材よりも、節があつても、植えた人の想ひが、はぐくんでくれた大地の気がこもっている地元の木のほうが、きつとその建造物を守ってくれるでしょう。

②下流域で上流の木を使う愛も發揮してほしい。

下流域で使用している水の源にある木を使つてください。まずは学校、保育園、幼稚園、図書館などの公共施設から始めてはいかがでしょう。1年に1回の山林ボランティアよりも心の交流が深まり、より強固な関係になるでしょう。

③大工技術の継承。

1400年も立派な姿を維持している法隆寺の塔に象徴される、釘も金物もボンドも使わない伝統木構造は世界に誇れる伝統であり、文化です。現状ではブレ

カットという機械任せで木が刻まれ、大工さんは腕を磨く楽しみも、腕を見せる喜びもなくなつてしまいました。技術の継承は、その技術を使う場があつてこそできることなのです。

④日本の地形に適した林業機械の開発。外国製の機械を買う補助金は要りません。日本の山に必要なのは鉄腕アトムの敏捷性と鉄人28号の強さを併せ持つような独自の機械を開発することです。

私は平成20年に千葉県市川市に新伝統木構造で「風の谷保育園」を造るお手伝いをしました。鉄筋コンクリート構造より2割安く建てることができました。園舎には木の香りが立ち込め、枝付きの大黒柱に素足で登る園児の姿があり、その子たちは好き嫌ひなく食事をするようになつたそうです。

こうして考えてくると大工が己の技術にイキイキとし、それを見守る人がその姿にワクワクし、それを利用する人が心地よくドキドキできる伝統木構造の建て方を守ることが、日本の林業を蘇生化する究極の策かもしれません。

参考文献

- 「森林の崩壊」 白井裕子著 新潮社
- 「だれが日本の「森」を殺すのか」 田中淳夫著 洋泉社
- 「山造り承り者」 島崎洋路著 山辺書林
- 「西岡常一と語る 木の家は三百年」 原田紀子著 農文協

あゝ、震災、野麦峠、そしてあぶらむ —— 一歩前出る力を ——

西間木 美恵子

今年の春は、梅も桜も、心から楽しむことはできませんでした。3月11日に起きた地震・津波に加えて、福島県は原発事故の影響で、多くの人々の生活が一変し、大変な状況を余儀なくされてしまいました。

私の住んでいる福島市は、県内の中通りに位置し、津波による被害はないものの、建物や道路などに、かなりの損壊がありました。(私の家も、食器類、本棚がメチャメチャになりました。)その後も、続く余震に怯えながら、放射線量を気にする苦しい日々を送ることになりました。

毎日、映像で流れる、子どもの頃から親しんでいた相馬の海岸の変わり果てた様子、避難所で過ごす人々の姿—このことをどう考えれば、これからどうすれば良いのかを、毎日毎日考え続けました。そして、「復旧・復興には、長い年月がかかるだろう。今は、まず、自分自身の精神力と体力を保ち、強めることが大事、それから自分のできることをやって行こう。」と思ったのです。

どうしようもない閉塞感がある中で、4月初めに、以前から計画していた「あぶらむでのお手伝い」に行くことを決め、まだ東北新幹線が復旧していない時に、高速バスで出かけたのでした。

あぶらむの風景は、何も変わらずに迎えてくれました。それから、4月、5月、7～8月かなりの日数をあぶらむで過ごし、洗濯、掃除、台所のお手伝いをする内に、徐々に、自分自身が解放されていくのを感じることができました。立教小や自然学校の子も達が、伸び伸びと遊ぶ姿に、外やプールで遊ぶことができないでいる福島の子も達を重ね合わせ、胸が痛むことも多々ありました。

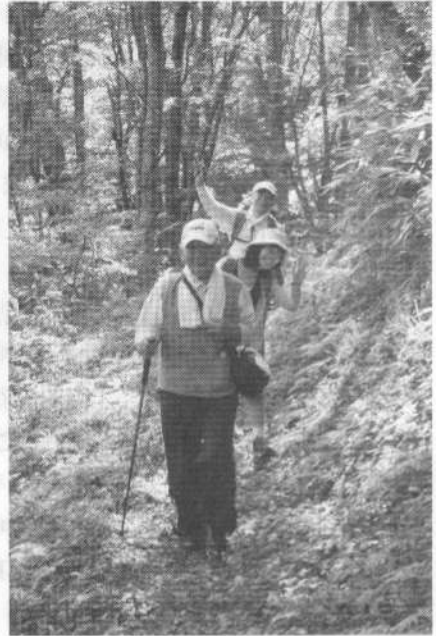
そして9月、「野麦峠越えウォーク」に参加、何と107kmを完歩することができたのです。この企画を聞いた時に、昔、山本茂実さんの「あゝ野麦峠」を読み、お芝居を観た時のことが思い出され、心が動きました。女工さん達が、家のために、国の政策のために働きに出て、歩いた野麦峠を、自分も歩いてみたいと思いました。ひたすら歩く「黙想ウォーク」ということにも、魅力を感じました。とはいえ、5年前に左足骨折をし、現在は日常生活に支障がないものの、不安感はありました。しかし、今置かれている東北三県の現状を思った時、前に踏み出そう！という気になったのです。

5日間、楽しいことが沢山ありました。特に、ずっと同室だったKさんとは、よく笑い何かにつけて大変お世話になり、心に残る思い出になりました。今でも、ふっと一人で、笑いが出ることがあります。毎日歩き続ける中では、本当に苦しい時が何度もありました。2kmもある権現トンネルの中は、恐怖でした。日頃、盲ろう者のお手伝いをしている私ですが、暗闇の中を歩くことの不安感を、身をもって感じさせられました。警女さんのことも脳裏をかすめました。とにかく、震災で亡くなった人々のこと、行方不明の方々、そして、今も苦しんでいる多くの人々のことを思いながら、自分を奮い立たせていたように思います。

107kmを歩き通したという達成感、私にとって、替えがたいものになりました。これか

らを過ごすうえでも、何か力を与えてくれるような実感があります。このように、私が歩き通すことができたのも、一緒に参加された皆様のおかげだと思っています。場面場面で支え励ましてくださった、お一人お一人の顔が浮かび、感謝の気持ちで一杯です。大郷先生の、ひたすら両ストックを使いながら、真剣に歩かれる後姿にも、励まされる思いでした。私にとって、今年最大のイベントでした。

いつの間にか紅葉の時季になり、10月末には、仲間11名で、今年では会津方面に一泊旅行をしました。吾妻小富士、磐梯山、五色沼、猪苗代湖などの見事な風景に、改めて、故郷福島県の素晴らしさを確認しました。本当に良い所です。今、故郷を追われ、自分の家に帰ることのできない人々が沢山います。私の家のお隣でも、89才のお母さんが、あちこち転々とし、息子さんの所で暮らすようになりました。私は、時々、本をお借りしたり、おしゃべりをする時を持っています。また、知り合いには、小さな子どもと他県に避難している人が何人もいます。日々の中で、私達ができることは少ないと思いますが、思いを寄せながら、自分も知恵を頂いたり、交流を続けていきたいと考えています。



旧野麦街道を歩く。
女工さんたちの苦勞が偲ばれる。

先日、原発には依存しないで、自分達の村を作り上げてきた、日本の原風景(あぶらむのような)ともいえる村の、村長さんのお話を聞く機会がありました。現在は、全村民が避難させられています。「ふるさととは遠くにありて思うもの、と言うが、ふるさととは、正にそこにいて慈しむもの、全村民が村に帰れるように応援してほしい。」と言われたことが、心に残ります。

困難があっても前に進む— そのような力を与えてくれた「野麦峠越えウォーク」でした。

今年、あぶらむには、2月の雪の時に始まり、11月には、また、友人と出かけることになっています。(今年6回目)

あの空間で、特に、諸魂庵で、ボンヤリと過ごす時が大好きです。晩秋のあぶらむは、どんな姿で迎えてくれるのか楽しみです。

野麦峠越えウォーク

鈴木 武次

本年8月初め、あぶらむの里から、次のような書翰が飛び込んでまいりました。

サンティアゴ巡礼の旅を通して“歩く”ということは一つの黙想であり祈りであることを教えられました。

「野麦峠」、それは「塩の道」であり、飛騨と信州を結ぶ唯一の道でした。そしてそれは又、日本の近代化を支えた「女工哀史」の道でもありました。「野麦」とは飛騨ではクマザサの実のことをいい、大凶作の年はその実を粉にしてダンゴを作り餓えをしのいだという。「野麦峠」という呼び名もここから生まれたといわれている。その昔、貧しかった飛騨の若き女性たちはこの峠を越えて信州岡谷へ糸引き女工として働きに出かけた。過酷な労働条件だったため、悲しい出来事も沢山あった。岡谷にある聖バルナバ教会は、そんな女工さん達に手を差し伸べるために建てられたという。

歴史におもいをはせつつ、信州・飛騨の豊かな自然の中を、内なる自分と対話しつつ、一緒に歩いてみませんか。

期 間 2011年9月14日(水)～19日(月・祝)

日 程

9月14日(水) 11時半 中央線 JR 藪原駅集合

12時 歩き出し 信州木祖村 渋沢温泉まで 18km

15日(木) ～ 野麦峠 お助け小屋 約 16km

16日(金) ～ 塩沢温泉 高根村 塩沢温泉 八峰館 21km

17日(土) ～ 高山市郊外 山口町 32km

18日(日) ～ 国府町 あぶらむの里 20km 計 107km

19日(月・祝) 解散

早速、あぶらむの里の大郷博司祭に参加申し込みをすると同時に、40年も前に読んだ山本茂実著『あ、野麦峠』を改めて読み直し、現地「野麦峠」(1672 m)を越えてみたいという気持ちに駆られたのです。体力的にも、多少の山坂を越える自信がありました。

又、参加される皆様と楽しい交わりの時が持てれば、素晴らしい思い出になるだろうと期待し、実施の時を待ったのです。その間に歴史的背景を少し考えてみましょう。

米国総領事、T. ハリスの来日により 1858 (安政5)年に『日米修好通商条約』が締結され、条約に基づき 1859(安政6)年7月神奈川(横浜)の開港となりました。我が国の輸出品は生糸・蚕卵紙・製茶等でありましたが、特に生糸の生産は外貨を稼ぐ優等生でした。

信州岡谷を中心とする製糸工場は女工さん達が生糸を紡ぐという単純作業でありました。故に、安い労賃で女工さん達に長時間労働を強制し、膨大な利益を生み、外貨獲得は近代日本の資本となり国力を充実させる原動力になっていったのです。

近代日本国家が欧米諸国の植民地に成らず、軍事力を背景に国際社会に台頭しえた事を考えますと、飛騨から信州岡谷へ糸引き女工として働いた、若き女性達の犠牲と献身的な努力は、日本社会に大きな利益をもたらしていたと言ってもまちがいません。

女工さん達が身を磨り減らし、1年間働いた末に、賃金を手にして故郷飛騨へ帰郷する姿は日本の近代産業の原動力であったのです。しかし、厳冬期の奥飛騨の山々の峠道を越えることは大変な危険が待っており、女工さん達にとっては命懸けの帰郷であったのです。

そこで、彼女達が苦勞して越えた「野麦峠」別名「生糸街道」を、実際に歩いてみなければ、

女工さん達の本当の苦しみは解らない、歴史の底流は理解できないと考えました。映画や小説で「野麦峠」は有名になり、誰でも「野麦峠」という言葉を知っておりますが、実際に旧道を歩き、峠に立ち、飛騨へ下っていくコースを辿られる方は少ないでしょう。

最近の道路状況は大変良く、車を使えば簡単に峠は越えられますが、乗鞍岳(3026 m)の秀峰を仰ぎ、東南から北西へと乗鞍の山肌を見つつ、大自然の懐に囲まれた歴史的な街道を歩く事は、よほど「野麦峠」に関心を持たなければ、めったに訪れるものではありません。故に、今回の「野麦峠越えウォーク」は、大きな意味があると思ったのです。

今回は、プログラムにも書かれておりますが、中央線の藪原駅から飛騨高山の「あぶらむの里」まで、107kmの道程を4泊5日で歩き通す訳です。このコースは単に「野麦峠」を越えるだけではありません。「ビックリ峠」・2kmに渡る「権現隧道」(女工さんは隧道内は歩いていません)・「美女峠」、など厳しい峠道を幾つも通らねばなりません。

山本茂実氏は『あ、野麦峠』の中で明治の「野麦峠」に関して次のように記しています。

早朝川浦をたつて5時間もかかってやっと野麦峠にたどりついた。手足も体も冷えきって事故は続出していた。川にすべり落ちて足をけがした者1人、疲れて雪の中に動けなくなった者3人、腹痛4人、(中略)しかし、野麦峠も石室の避難小屋あたりまではまだ何といても傾斜も少ないが、これからかかる頂上も間近い信州側最後の急坂は、雪でも積もったらそれは歩ける道ではなかった。(中略)

吹雪の道はどんなに冷たくとも前の人にしっかりとついて離れないようにしていかないと道がわからなくなってしまいます。足の弱い者や病人の荷物は工場の男衆やねえさんがとってさげてくれ、それが6つも7つもだんだんふえてくると、ちょうど千成ビヨウタンのようになっていました。お助け茶屋では会社の人がおかゆ一杯ずつ買ってくれ、それでやっと元気を出して飛騨へ下ったのでございます(多田ゑい・明治28・古川)

上記の記述は岡谷へ糸紡ぎにいった女工さん達が飛騨へ帰郷する、明治40年代の12月27日頃の状況で、現在では考えられない厳しい冬の「野麦峠」を必死の思いで帰郷する女工さん達の姿が彷彿としました。12～13歳から25～26歳の元気盛んな女工とはいえ、厳冬期の峠には多くの危険があり、雪道に足を取られ谷底へ転落し、命を落とした犠牲者は多数を占めておりました。現在のような防寒具はなく、足袋と脚絆草鞋掛けで雪道を越える、凍傷になり、立ち止まれば凍え死んでしまう、過酷すぎる現状があったのです。

今回の「野麦峠越え」は初秋の9月15日、快晴の日で、厳冬期の峠の状況はその時期に実際に歩いてみなければ解りませんが、2日目に辿った「野麦峠越え」は大変な思いでした。舗装はされず浮き石の多い旧道を登り、お助け小屋に1泊。翌日女工さん達が苦勞して歩んだ急な坂道を、喘ぎながら辿る事が出来ました。

●岡谷聖バルナバ教会

岡谷聖バルナバ教会は1923(大正12)年にH.H.コーリー司祭(1883 - 1954)が下諏訪町四

王に転居して、岡谷への伝道が本格的に始められた。コーリー司祭はカナダの東部のケベック州・バーンストーン生まれなので、他の宣教師のような英国人的優越感がなく、語学の天才で何ヶ国語も話したという。岡谷の教会は1925(大正14)年1月1日にハミルトン主教の許可を得て準教会を組織して「岡谷聖バルナバ教会」として認可された。武淵静雄師は1924(大正13)年3月、リー主教の経営していた福岡神学校を卒業して、コーリー司祭の下で4月1日から南信濃地方(岡谷)の伝道に従事した。また聖堂の建設にあたって、

「コーリー氏は「聖堂はオルター(祭壇)とフォント(洗礼盤)を屋根と壁で囲んだものである」と常に教えられた。この意味は聖堂は単なる建物ではなく、主キリストのたて給うた救いを得るに必要な二つの sacrament を行うための聖なる場所であるということである。コーリー氏はこの根本義を建築によって表現することを主張された。実際には周囲の土台を据える基礎と同じ深さにコンクリートで揺るがぬ台を固めてその上に石のオルター・石のフォントを造ったのである。(中略)

会衆席を椅子にするか畳にするか、これについてはカトリック甲府教会の神父に畳を勧められ、また数人の女工達より「私たちは終日腰掛けて働いているので教会に来たときぐらいいは畳に座りたい」との声があり、問題なく畳に決まった。

今や、岡谷は日本一、もしくは世界一の生糸の産地となった。大きな製糸工場は合わせ30、それに加えて小さな製糸工場も多数あり、岡谷に住む主婦は暇をみては繭から臭いのする絹の糸を巻き取っている。工場は忙しい時期になると何千という数の女工さんを田舎から集めて雇う。(中略)岡谷で働く女工さん達は1日14時間、定休日である毎月15日とその月の最後の日を除いて毎日働かされているからである。そんな女工さんこそカナダの女性信徒の祈りと想いを必要としているのである。工場には日曜日もない。そこで、この地の教会は工場で働く「女工さん」のために、彼女らの定休日である15日と月の最後の日に、特別な礼拝を開き、交わりの時をもっている。

以上は岡谷で働く女工さん達の苦しい労働条件の下に、強制的に長時間労働が課され、労働作業が強化されていた実態を述べると共に、岡谷聖バルナバ教会は、そのような女工さん達の苦しみを少しでも緩和し、女工さん達の休日に、苦しみからの解放を願い、特別な礼拝を捧げる、聖バルナバ教会の姿が反映されています。女工さん達の苦しみを少しでも受け入れ、慰めを与えることに手を差し伸べていたのです。

さて、私にとって今回の旅は大変大きな拾いものをしたことを最後に記しておきます。

「野麦峠」を越え、阿多野、上ヶ洞、中之宿、中洞、寺附、甲、最後の難関「美女峠」を降った所に大野郡漆垣内町山口村がある。この山口村は飛騨高山からの最初の宿場町で江戸時代から村落として賑わっていた場所でありました。その山口村の中心に大きな境内と伽藍を持つ円徳寺があり、すぐ前に「義民三郎左衛門の碑」と書かれた大きな石碑がありました。その石碑の裏側に次のような碑文が記されておりましたので書き取って来ました。

山口村の三郎左衛門は 大原騒動の際、宮村大集合の事にかかわり 安永三年八丈島に流

罪、文化十三年同島に没す一享年八十二歳。法号即譽了頓信士のへ谷岡、ア」部神大王
天の幸義民三郎左衛門の碑、岐阜県知事、武藤嘉門、アのふれま坐べーイスくーハ、世々の
の逸主トイハシハ二日「日」半(日)五大) 2521 知全舞の谷岡、そつさ式」語も語園々時つ木

私はこの碑文を書き写した時、何故か、歴史からの解答を得たような気がしたのです。飛騨の女工さん達は何故、岡谷の製糸工場へ糸を紡ぐために、命懸けで危険な「野麦峠」を越え、苦しみを覚悟し出張していったのか？この疑問に対する解答を考えてみました。

明治の初め信州岡谷地方に製糸工場が出来たから、その労働力の需要に応じ、糸紡ぎをすれば賃金が支払われる。現金収入のない飛騨地方の貧しい家庭では、女子は口減らしのため、岡谷の工場へ行き糸紡ぎをすれば食事が与えられ、暮れには賃金を持って帰ってくる。貧しい飛騨の人々にとって大変な魅力であった。故に、女工さん達は野麦を越えたと。

これは一つの解答であるが、何故、飛騨の地は貧しく、生活が苦しかったのか？その答えは、もっと深い歴史的な事件が存在していたことを考慮しなければならないのです。

確かに飛騨は山岳地帯で食糧生産には適さない地方であるが、江戸時代の農民闘争の結果が、この飛騨地方を最悪の状態に陥れていた事を理解する必要があると思います。

山口村「義民三郎左衛門の碑文」には「大原騒動の際、宮村大集合の事にかかわり、安永三年八丈島に流罪、文化十三年同島に没す」と記されています。この山口村は1773年に起こった「飛騨国天領安永二年一揆」に関係があり、江戸幕藩体制中期に起こった惣百姓一揆の一端を担っていたのです。農民の総代三郎左衛門は島流しになっています。

安永元年、田沼意次が老中となり財源確保のために、幕府の天領地からは年貢の増税と取奪を行いました。幕府はその権力を示す必要性から、農民に対しては犠牲が強要されたのです。大原騒動は一揆闘争に発展したものの、幕府の力を示す鉄砲の前に敗北します。

そのため、翌年以降農民の生活が急速に悪化しました。従来より26%増の年貢の取奪は、農民の生活を極度に悪化させ、自作農から小作への転落を余儀なくさせたのです。

江戸末期には農民の生活は他の地域より遙かに劣悪な状況にありました。貧しい農民にとっては、江戸から明治に時代は変わったとて、その生活は苦しく、現金の収入はなく、少ない農地は地主に抑えられ、小作農として喰うか喰われるかの、苦しい状況であった事を知らなければなりません。飛騨地方の貧しさに、天領という宿命的な農村の貧しさが底辺にあったのです。

飛騨地方の女工さん達は、厳冬期の「野麦峠越え」を命懸けで行い、苦しい条件の下でも必死に働き、12月末の年季明けに、再び峠を越え故郷の村々へ賃金を運び、親兄弟姉妹の生活を支えていった大きな要因は、将に上記のような歴史的な流の中にあったのです。

同様に、この飛騨国天領安永二年一揆(「大原騒動」)の発祥地の地図を見ると、なんと、あぶらむの里を含む吉城郡宇津江村、金樋村、広瀬町村、八日町村、大沼村等が「大原騒動」に関係していたこと、更に美女峠の終点山口村の石碑「義民三郎左衛門の碑」と深い関係があることを知った事は、この「野麦峠越えウォーク」プロジェクトに参加したことが、如何に意義深いことであったかを「あぶらむ通信」に報告しておきたかったのです。

新編文八平三水安、りかやせに専の合業大村宮、類の債額最大、お門流式頭三の村口完

父 娘

この夏あぶらむは、私の卒業生の子ども達、ジュニア世代によって助けられました。あぶらむに対する父と娘の目線をお伝えます。

今年のおぶらむ自然学校報告

自然学校ボランティア・スタッフ 久世 治靖

実は今回、6月ごろに自然学校のお手伝い募集の手紙が我が家に舞い込んだとき、最初に行くことを決めたのは高2になっていた我が家の次女、萌子でした。何を考えてのことなのか、自分で頑張ってくるから父親には来るなど申します。とはいえ高2が友達と2人で行くのではお手伝いというよりむしろ足手まとい。世話される参加者が増えるだけのようなもの。それでは申し訳なく、娘の仕事ぶりには一切、口を挟まないという約束をして、ボランティア・スタッフとして私も参加することと相成りました。

ボランティア・スタッフとしての私の仕事は、プログラムを行う際の大郷先生のサポート。私は本職が小学校の教員で、子どもに接しながら、いかに楽しく面白く物事に取り組むか、ということをしよっちゅう考えているのが仕事です。その点では、まあ、いつもの仕事の延長線上といったところでしょうか。とは言うものの参加してくる子どもたちの年齢は6歳～15歳。2.5倍の年齢差のある、しかも初めて会う子どもたちに何をどうアプローチするかわかるか、なかなか難しくもあり面白くもあり、いつもとは違った経験をすることができました。萌子を含めボランティアに来ていた高校生は5名。大学生が1名。彼女たちの仕事は厨房その他育さんや成さんの手伝い、および子どもたちのお姉さんお兄さん役。こちらに関する記述は、娘もレポートを書くようなのでこちらに任せます。

今年のおぶらむ自然学校は8月5日～10日の5泊6日。初日からの参加が11名。最終的には17名(小学校低学年7名、高学年5名、中学生以上5名)。小学校高学年以上ならば親元を離れて数日を山の中で過ごすのも学校で経験済みである程度平気でしょうが、低学年の子はそうでもないはず。あぶらむをほとんど知らない、来たのも初めて、という子も少なからずいました。また兄弟と一緒にではなく、たったひとりで参加してきた小学1年生の強者も1人いて、それだけでもすごいなあ、頑張ってるなあ、たくましくなるなあと思いました。実際低学年の子たちの中には夜になると泣いちゃったりさみしくなっちゃったりした子もいたのですが、それをまた中学生以上の子たちがよく面倒をみてくれて、こういったところにも異学年、異年齢の子どもたちの集まりである自然学校の良さ、場による教育、学びと言ったものを感じました。

用意されているプログラムは多彩です。あぶらむ運動会、ツリー・クライミング、じゃがいも掘り、ピザ作り、夜の山中かくれんぼ、乗鞍登山、川遊び、ナイトハイク、滝飛び込み etc etc。子どもたちは自然の中で思いっきり、かつ生き生きと活動していました。どれが目玉、と考えてみても、どれも目玉、としか思いつきません。実際、最後の夜に行ったキャンプファイヤーで、子どもたちに「一番思い出に残ってるのは？」と聞いてみたところ、答えを選ぶのはみんな大変だったみたいです。

今回はあぶらむの戦場まっただ中にいきなり入った6日間でした。自然学校だけでも大変

なのに、今回のキャンプは立教小学校のキャンプから中1日。その中1日にもそれなりにお客さんがありましたし、終わった翌日からは名古屋の金城教会のキャンプ50人の宿泊予定が入っていました。スタッフルームにスケジュール表が「2011夏の陣」と名打って張り紙してありましたが、言い得て妙です。育さんを中心とした裏方(厨房やら宿のセッティングやら)と、先生を中心としたプログラムと大変さが両方あって、裏方は裏方で大忙しです。先生は先生で、子どもたちに本当にサービス満点。でもその前段階としてプログラムをどうするか、安全に過ごすにはどうすればいかに常に気を配っていなければいけないわけで、あぶらむの皆さんのすごい労力の上にこれらのキャンプが乗っていることがよく分かりました。また、あぶらむに遊びに来るといつも感じる、まるで田舎に帰ったかのような居心地の良さも、同じものの上に乗っているのだとも思います。

比較をするものでもないのですが、公立学校では一般的に、危険はできるだけ前もって排除しておこう、という考えが働きます。また図画工作をするにしても、必要なものを買ってきて作ります。人の都合に、できるだけ素材を合わせるのです。100人~200人の面倒を一気にみるわけですから、致し方ない側面もあります。世間の目の中で無難さを、教育課程という縛りの中で効率を優先する場合も多くあります。しかし、あぶらむの自然学校ではそんなことはしません。1本のロープで5mの高さまで登ります。プールは無いけれども、川があります。川遊びの途中でハチが出たら、場所を変えます。画用紙もノートも無いけれども、石を拾って乾かしてペイントし、お土産を作ります。お寺の鐘を逆さまにして作った五右衛門風呂があります。一輪車と薪でリレーをしてあぶらむオリンピックを開きます。地面に食材を埋めて蒸し焼きにしたり、ドラム缶と薪でチキンを焼き上げたりして豪華な食事を作ります。危険も素材も、あぶらむではそこら辺にたくさん転がっているのです。そして、その素材に人を合わせるのです。そのためには知恵と知識が必要です。知恵はおとなも子どももそれぞれが、または一緒になって絞り、知識は先人から借りてきます。私は職業柄、公立小学校だからできること、公立小学校だからしなければならないことがたくさんあると考えていますが、あぶらむだからこそできること、あぶらむだからこそしたいこともたくさんあるなあ、そう思えた6日間でした。

また今回は、最初に書いたように萌子を含め卒業生の子どもやその友達が6名ほどボランティアとして参加していました。彼女たちはまかないや掃除などの裏方から、一緒にプログラムに参加したり手伝ったり(肝試しのお化け役など。逆に子どもたちにおどされて泣いていましたが・・・)。娘には「自分で考えて自分から動く」ことだけ言ってあったのですが、それなりに戦力にはなったみたいです。実際、おとなでも参加している子どもでもない、スタッフとしての彼女たち6人がい



先達の知恵「結び」を駆使し、ロープ1本でのツリークライミング(木のぼり)

てくれたのはいろいろ意味があり助けられもし、正直によかったと思っています。また、同時に彼女たち自身も大きな経験、学びを得ることができたと感じています。萌子は実は半分は大郷先生が名付け親のようなもので、小さい頃からずっとあぶらむに遊びに来ていました。私も立教での先生の教え子です。サケが生まれた川に帰ってくるように、あぶらむで育った者たちがあぶらむに帰ってきて、また成長の機会を与えられつつ、同時に何らかの働きをなすことが出来たのかなと思うと、嬉しいものがあります。

私にせよ娘たちにせよ参加した子どもたちにせよ、あぶらむの地で、大きな自然、人、時間に包まれて、活かし活かされて成長できた6日間だったと思います。感謝。

今度はスタッフで

久世 萌子 (高2)

私があぶらむ自然学校に最後に参加した時は小学校5年生でした。現在高校2年生。だから今回はボランティアスタッフとして参加させていただきました。6年ぶりの自然学校！正直とても緊張していました。今まで普通にあぶらむに行くときもちょっとお手伝いはしていたけど、完全にスタッフとしてあぶらむに行くのは初めてだったし、お父さんに行きの車の中で大郷先生が怒ったらどれだけ恐いか脅されていたから(笑)

着いたらいつも通りの大郷先生や育さん、なるさん達の笑顔があって少し緊張がほぐれました。でもこの日はこれからの6日間ちゃんと自分がスタッフとして迷惑かけずにやりきれるか不安でいっぱいでした。

6日間予定きゅんきゅんのハードスケジュール。ちょっとした休憩の間も次の準備をしなければならなくて、座る暇もなく動き回っていた気がします。でも、しんどいなあって思っているときに子どもたちの笑顔とか、もえーってという呼び声を聞くと、よし！がんばろう！って思えました。やっぱり子どものパワーってすごいですね。

それに、いつもこれをやっている大郷先生達って本当にすごいんだな、ありがたいなって改めて実感しました。楽しいことをやっているときって、絶対に誰かが裏でがんばってくれているんだってということが、今回スタッフとして参加して気づけたことです。このことに気づけただけでも参加してよかったと思えます。

子どもたちは本当にかわいかったです。もともと子どもは大好きなんですけど、みんな素直でかわいくって毎日癒されました。どの子も元気いっぱい、パワーが溢れていて、帰るとき寂しくて号泣しちゃうくらいみんなが大好きになりました。あのメンバーと一緒に6日間を過ごせて本当よかったです。みんなありがとう！

一緒にボランティアスタッフやった東京3人娘、幼なじみのなぎ。年齢はバラバラだったけどすごい仲良くなれました。あたしが1番年上だったけど、年とか関係なくみんなで仲良く協力しながらできたから6日間乗り切れたんだと思います。またみんなであぶらむに集合したいです！

最初の緊張や不安がうそみたいに充実した5泊6日を過ごせました。怒られたことも勉強になったし、この6日間やりきって自分自身一回り成長できた気がします。大郷先生誘ってくれてありがとうございます！またお手伝いしに行きたいです。

あぶらむ大好きー！

〈野麦峠越えウォーク&ラン〉に参加して

下田 英一

期間：ウォーク(11年9月14～18日) ラン(11年9月17～18日)

スタート：長野県木曾郡木祖村 JR中央線藪原駅

ゴール：岐阜県高山市国府町 あぶらむの里

距離：107km

高低差：藪原駅(924m)～野麦峠(1672m)～あぶらむの里(660m)

標高差約750m、途中400m弱下りもあるので、実質1,100m強の登り

参加ランナー：西村正和、静谷英一、川村佳子、下田英一

野麦峠越え107kmは、私にとって実に楽しくも幸せなランでした。

走るというのは自分の身体を使って走っているのですが、実は、自分の身体だけで走っているのではないのだと思いました。

2008年4月さくら道にリレーで参加し、同年10月斑尾トレイルランに参加、2009年8月には、あぶらむチャレンジランが開催され、100kmを宮田義明さん、村岡薫さん、宮崎秀貴さん、70kmを倉持章子さんが走り、また、私も含め、21kmを走った方も多くいました。

いつも唐突なイベントではありましたが、07年冬から、最低月1回くらいのペースで、宮崎さんが中心となって、日曜日の皇居ランが続けられていました。(先輩でもありますが)仲間とのランのつながりが、今回の野麦峠を走りきることにつながったのだと思います。

3年前にひざを痛め、最近では、毎週ひざにヒアルロン酸の注射を打っておりました。痛みは、大学の時に膝の十字靭帯を切っているのも、その影響もありますが、ご高齢の方が階段の昇り降りで痛いというのと一緒で、老化によるものです。そのため、長距離や速いスピードで走ることはしていませんでしたし、今回の野麦峠ランも自分では参加できないと思っておりました。

でも、ぜひ走りたいと思い始めたのは、西村正和さんが、「大郷先生から自分の教育観を問われ、自らとの対話をしながら、走ろうと思っている」とおっしゃったことをお聞きした

からです。最近では、超長距離を走るということをしなかった正和さんが、自分と向き合おうと本気になっているというので、昔から何度も一緒に走らせてもらった正和さんと、野麦峠ランという、その時空を共にしたいと思いました。

野麦峠のコースは素晴らしいものでした。

女工さんたちがたどったルートに沿って、今の道を通りますが、時々旧道を通ります。その旧道は、女工さんたちが飛騨古川から岡谷をめざし、また故郷に戻るために歩いた道そのものです。そこを私たちも通ります。

1日目は、上っても上っても、上り坂でした。

正和さん、静谷さん、佳子さんとともにスタートして、1日目のゴールは、佳子さんと一緒でした。早い佳子さんと一緒に走り、ゴールできたのは、一人で走るより、誰かが一緒にいてくれる方が、ずっと安心できたからです。

知らない道を進むには、一人より誰かと一緒の方が安心して進めることを実感しました。だから必死でついていきました。

その晩、お助け小屋に泊まり、『あゝ、野麦峠』（山本薩夫 監督）のビデオを見せて頂き、もう少し、女工さんたちの生活について知ることができました。

女工さんたちが歩いた野麦峠の道をたどりつつ思っていたのは、彼女たちが、今の中学生くらいの年齢だということ、その子たちが過酷な労働を強いられ(すべてが悲惨なばかりではなかったようですが)、親元に年に2回しか帰れない生活環境の中で、生糸の輸出を通して、日本を支えていたこと、そして、自分の娘が、彼女たちと同じくらいの年齢であるということです。

そう思うと痛みや苦しみを言っていられないと思いました。

女工さんたちが苦勞して働き、また、歩いたこの場所を、これだけのサポートを受けながら、好きで走ることでできる自分というのは、実に幸せな存在だと思います。好きなことをして、本当に幸せな自分があるのだと思って走っていました。

2日目は、40km地点までは走り続けようとしていました。何とかそこまで走らないと距離を稼げないと思って走りました。そこからは歩きと走りで、美女峠を上り、古川へ向かう国道41号線を進みました。ゴールまでは実に長かったです。

あぶらむでのゴールは、大郷先生、ウォークの皆さんに大きな祝福をして頂きました。花火とクラッカーとビールと皆さんの笑顔で祝って頂きました。ウォークとランとが同じゴールで合流し、祝福しあうというのはとても盛り上がり、大感激でした。

今回のランは、自分では走れるかどうかかわからず、直前になって参加させて頂きました。それでも、なんとか走りきれたのは、自分以外の力が自分に働き、身体がもっている以上の力が出たのだと思います。

それは、野麦峠という場所と歴史、素晴らしいコース、先に歩いている方たちや共に走るランナーの皆さんがいたこと、伴走者の支え、そして、ここ数年、仲間たちと集まって走り続けていたこと、それらの全てが支えでした。だらしのない走りをしてはいけないと思わずにはいられません。そして、走ること(あるいは、歩くこと)は、生きることと一緒になのかもしれないと感じます。過去から現在まで人に支えられてきたこと、また、人以外の何かかも知れませんが、何か目に見えない働きによって、力を引き出されてきたのだと思います。

だからこそ、自分の生きるあり様もだらしなくはないのではないかと思います。仕事の中でも自分は誰かに支えられています。部下や幹部に支えられています。日常的にも支えを受けていることを意識しようと思います。良い機会を頂き、誠にありがとうございました。

中学生スタッフとして

下田 寛子 (中3)

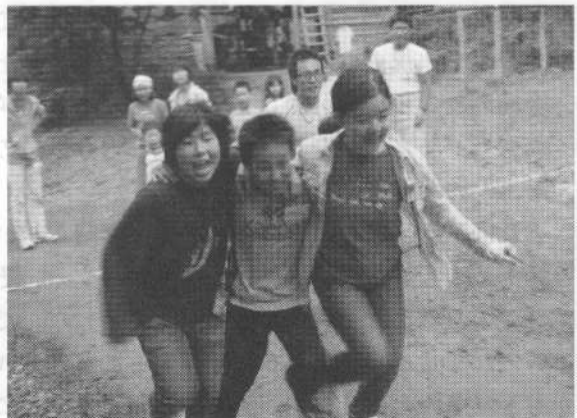
私はこの夏、中学生スタッフとして、あぶらむ自然学校に参加させていただきました。学校での夏休みの課題として「ボランティアをする」ということがあり、幼いころからお世話になっていたあぶらむでスタッフをさせていただく良い機会と思い、2人の友人と、初めて宿泊客としてではない形であぶらむを訪れました。

到着して挨拶もそこそこに母屋の部屋の掃除や布団の準備などからスタッフとしての生活が慌しくスタートしました。お勝手では、毎日たくさんのお料理を作り、食事が終われば食器を洗い、またすぐ次の食事の準備が始まったり…と、私たちが手伝わせていただいたお仕事はほんの一部だったとはいえ、やることが本当にたくさんあって、たくさんの方がたくさんのことをこなしているから、私たちは楽しいあぶらむでの生活を送れていたということに気づかされました。

自然学校の前日、大人スタッフの方々と明日から始まる自然学校のプログラムについて話し合いました。「これは大郷先生の準備があるからこの日にしかできない」「途中から来る子のことを考えると、これはこっちの方がいいのではないか」「夜の暗さを体感することと安全性を考えるとここに誰々が立って何人組で回すのがいいだろう」等々、たくさんの事柄を踏まえた上で、自然学校の内容が決まっていきます。これからの5泊6日が楽しく安全に過ごせるかがおおよそ決まるので真剣に話し合われました。

また、遊ぶことに夢中になってしまっていて、けがをしてしまった子に対してや、ツリークライミングなど大けがをしかねないことにおいては、大郷先生が強く叱る場面を何度も見ました。私の中での優しい話しかけ方や下ネタを話すイメージなどからはかけ離れていて、正直驚きましたが、こうやっていつも子どもたちの安全を考えている先生の一面を見たように思います。

私たち中学生スタッフは、子どもたちと一緒にプログラムに参加することができたので、昔の人々の発明“結び”を使い、ロープだけで、足がかりのない木でも高さのある枝まで登ったり、街灯のない山の中でかくれんぼをしたり、子どもだけで2kmほ



あぶらむオリンピック。いい顔ですね

ど歩いたり、みんなでゲームしたり……。自然学校のプログラムを一緒に楽しんでいました。開会式で、自己紹介をする前から子どもたち同士で一緒に楽しそうに遊んでいたことを思うと、あぶらむに来る子たちは本当にすぐ仲良くなるなあと感心してしまいます。初めは自然学校に参加する予定ではなかった兄妹もすぐに馴染めてしまう空気感は、私が幼い頃から遊びに来ていた頃からずっと変わらないあぶらむ独特の安心感がそうさせるように感じます。自分の家に帰ってきたようなあたたかい空間を作り出しているのは、大郷先生や育さん、あぶらむに携わる方々のおかげだったのだと気づかされるボランティア体験でした。今回は自然学校の途中までしかいられなかったことは残念な点でしたが、まだまだ戦力として力不足な私たちを受け入れてくださり、たくさん学ばせていただきました。今回、ボランティアの中で、自分から動く、ということを目指していたのですが、ここでこれをしたら迷惑ではないか、とあってしまい、何をすればいいですか、と何度も何度も聞いてしまっていたように思います。今回どれほどお役に立てたかわかりませんが、またあぶらむを訪れる機会には、この自然学校で学んだことを生かして、あぶらむに携わる人になれるように、自分から動いていきたいと思っています。

2011年 あぶらむこの一年

- 1月・それなりにおだやかな年明け
- ・8～10日 沖縄からの雪遊び訪問団。周辺は大雪だったが、この谷すじは例年の1/3程度ほどだった。嬉しいようなどこか寂しいような…
- 2月・厳冬期というのに敷地内の道路の雪がとけ通行不能状態になる。暖冬なのかあり得ない事
- ・神戸学生・青年センター食糧環境セミナーに出席
- 3月・5日 あぶらむ法人化にむけての第1回世話人会
- ・11日 東日本大震災発生
- ・12日 春を迎えることの喜び「春一番の会」急遽中止
- ・14番目家裁少年、あぶらむ卒業セレモニーの一つとして富山まで76km歩く
- ・17日 家裁少年審判(14番目)
- ・25日～4月5日 4年振り第12回子どもから大人までのネパールの旅(参加者13名)
- 4月・JA 岐阜厚生連看護専門学校新入生オリエンテーション・キャンプ
- ・第18回さくら道国際ネーチャラン
- 5月・田植準備開始
- ・野麦峠越えウォーク & ラン下見開始
- ・18日 田植
- ・21日 津軽三味線二代目高橋竹山被災地支援野休みコンサート
- ・家裁少年(15人目)受入れ

- 6月・畑のイノシシ防止ネット完成
 思き・富山までのサイクリング
 自れ・アース・オープン完成
 19日・宮城県亘理町の被災地訪問
 まま・太陽温水器設置
 7月・1日～4日 沖縄にて講演会、愛楽園訪問
 ・4日「あぶらむ法人化 第2回世話人会」
 ・韓国より研修少年来里
 ・18日 なでしこジャパン ワールドカップ優勝
 ・29日～3日 立教小学校あぶらむの里キャンプ（参加者28名）
 8月・5日～10日 あぶらむ夏期自然学校（参加者17名）
 ・名古屋金城教会キャンプ（50名）
 ・芦屋聖マルコ教会キャンプ（34名）
 ・27日 三代目桂歌之助落語会
 9月・3日 紀伊半島豪雨
 ・14日～18日 野麦峠越えウォーク&ラン
 ・23日 稲刈り
 ・留岡幸助の足跡を訪ね北海道家庭学校を視察訪問
 10月・4日 脱穀（収量は平年並み）
 ・8日 WAYNO アンデスの風コンサート
 ・木工所増改築開始
 11月・逝去者記念式
 ・21日 ちらりと初雪
 ・25日 公証役場へ法人手続第一次申請、「定款」の正式認可を受ける
 ・冬用野菜収穫、越冬準備開始
 ・15番目家裁少年審判
 12月・あぶらむ通信発送
 ・あぶらむクリスマス会

2012年 こんなこと（行事予定）

●里山生活体験シリーズ（新企画）

- ・田植え 5月26～27日（予定）
- ・田草取り 随時
- ・稲刈り 9月22～23日（予定）
- ・脱穀 10月上旬
- ・落葉集め、焼きいもそして薪づくり 11月23～25日

●コンサート (日) 8月25日 (土) 8月25日 (土) 金基ス、セバ

- ・三代目桂歌之助落語会 8月25日 (土)
- ・WAYNO アンデスの風コンサート 10月6日 (土)

●自然の中で

- ・雪祭り 1月7～9日、2月10～12日
 - ・夏期自然学校 8月6～11日 (予定)
 - ・野麦峠越えウォーク&ラン 9月12～17日 (予定)
 - ・野麦峠旧道ハイキング 10月7日 (日)
 - ・子どもから大人までのネパールの旅 2013年3月25日～4月5日 (予定)
- どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

寄付者一覧 ('10年12月3日～'11年12月4日) 敬称略

静谷英夫／塩田純子／森田トミ／吉川仁・恵子／江田宜子／笹部昭博／櫻井智則／宮本龍子／吉羽真治／味岡努・敏江／江洲良秀・文子／竹田純郎・ひろ子／松居勲／清水靖夫／田辺聖公会愛の園シオン会／東京聖三一教会／片倉小夜子／澤木実枝子／新家恵子／鈴木信子／北昌子／松平信久／佐瀬京子／片山佳子／佃寿子／藤井和彦／平岡和子／岡田賛三／森田喜之／八木克道／古川秀昭・昭子／ジーン・レーマン／鷹見安浩・久枝／長谷幸雄／松岡和夫／野崎久子／深田馨子／松岡龍哉／鈴木武次・保子／矢崎ふき子／倉石昇／岸村信治／河合昇／俵里英子／豊見城聖マルコ保育園／瀬木貞子／清田眞理子／神原一二美／大山義男／財満研三郎・由美子／大橋雅子／中部学院大学宗教委員会／中村力・英子／石井秀夫／今関公雄／千葉復活教会／東祐子／安藤隆年／愛知聖ルカ教会／加納厚／長谷川秀司／伊藤浩子／赤尾昌人／二井正秀／新開桂／尾崎和廣／渡辺洋一／畑井正春／高瀬留美／猪野愈／谷市三／速水直子／宮崎なを／宮古聖ヤコブ教会／富山聖マリア教会／太田喜之・昌子／菊地卓大／佐藤縁／星野一朗／矢後和彦・正子／福岡女学院中学校・高等学校宗教部／坂尾新一／須間栄津子／宮本真紀／中島務／鈴木育三／宮里順子／山田益男／江見淑子／中島淳／新倉俊吾・久乃／静岡聖ペテロ教会／金子美弥子／根本四郎／横浜聖クリストファー教会／池崎純一／市川聖マリア教会／遠山章夫・秀子／山川太津雄／鶴川雅行／森松長明／西田浩子／長谷川牧子／根本利子／クラーク・ジェームス・ローレンス／宮城正男・正子／小島政一／比屋根るり子／佐々木慶太郎／坂本吉弘／前田晃伸・容子／筒井健作・弥生／松岡和夫／芦屋聖マルコ教会教会学校／大塚梅子／小林信夫・加代／畑野榮一・寿子／成田久夫／外村民彦／セントポールライオンズクラブ／田尾兵二／園部秀敏／鶴川久／大郷穰／松田恵子／南山大学人間学科ゼミ一同／石原つや子／島袋洋子／星野八千代／加倉井誠／西間木美恵子／神愛修女会／ホセ・ミコ (在スイス)／加藤寛

||||||| ガヴィス基金 ('10年12月3日～'11年12月4日) |||

竹村真紀 / 上田敏明

||||||| 2011年会費納入者一覧 ('10年12月3日～'11年12月4日) |||

相沢牧人 / 朝比奈誼 / 朝比奈時子 / 穴井悦子 / 味岡努・敏江 / 赤井充也 / 新垣タケ子 / 荒井優仁・彩月 / 赤松道子 / 安達宏昭・真理子 / 岩間光雄 / 岩坪哲哉 / 岩坪瑞枝 / 糸数宝善 / 糸数敦子 / 一柳百 / 伊東日出子 / 伊藤文雄・宜子 / 岩沢満・喜美 / 石崎東人 / 石崎奈生美 / 伊藤幸史 / 上村誠 / 上田敏明 / 岡野峻 / 小野裕 / 大八木米子 / 大房健樹 / 大城恵子 / 大杉匡弘 / 小川卓 / 大橋雅子 / 大塚梅子 / 小野田恵子 / 川口弘二 / 川上玲子 / 加藤正・真知子 / 片桐多恵子 / 笠井正志 / 川満一彦・すわ子 / 金子真 / 笠原雅子 / 片岡義博 / 河合由美子 / 岸井孝司・ミツ子 / 鬼本博文 / 鬼本照男 / 倉辻明男 / 栗山盛雄 / 栗山洋子 / 黒田則子 / 小泉恵子 / 河野裕道 / 小林信夫・加代 / 小柳證 / 三瓶富子 / 澤野弥生 / 斎田美代子 / 佐藤芳子 / 櫻井智則 / 斉藤寛明 / 笹岡淳也 / 佐藤哲典 / 清水幸平 / 渋谷聖ミカエル教会 / 志村弘子 / 渋谷一郎 / 下田英一・由香 / 鳥袋洋子 / 城下彰 / 柴原薫 / 島文子 / 渋谷真理 / 鈴木孝雄 / 杉村進 / 鈴木信子 / 砂川博秋 / 鈴木真喜子 / 鈴木正士 / 鈴木裕子 / 仙敷正俊 / 高瀬留美 / 高橋保 / 棚橋忍 / 棚橋美江 / 田口清吾 / 竹内元章 / 俵里英子 / 丹安紀子 / 田中孝子 / 谷孝子 / 武原正明 / 谷莊吉 / 高濱友里江 / 田部博文・あさ子 / 竹村真紀 / 筑井宏子 / 佃寿子 / 寺谷恵美子 / 泊哲次 / 桃原松五郎 / 富永隆史・敦子 / 時高照子 / 外村民彦 / 直井雅子 / 永井深雪 / 中台哲夫・信子 / 中山美世子 / 長坂尚 / 西垣正子 / 西村正和・未帆 / 新倉俊吾・久乃 / 西間木美恵子 / 西口晃 / 西口喜久枝 / 西村斐佐代 / 畑野榮一・寿子 / 畑井正春 / 長谷川秀司 / 萩谷長生・睦子 / 土師晴子 / 平野幸男 / 日野忠一・静子 / 古市進 / 福田桂 / 福田亜矢子 / 福田一太 / 深田馨子 / 星野一朗 / 干場恵子 / 松岡和夫 / 松居勲 / 前田眞智子 / 丸山恒 / 松田捷朗 / 又吉亀次 / 前田容子 / 丸山千早 / 前田晃伸 / 前田晃 / 前田広世 / 松井尚子 / 三原エイ / 宮田洋子 / 宮城正男・正子 / 宮崎なを / 三原一男・京子 / 室岡鉄夫・恵 / 向山信義 / 武藤六治 / 百井幸子 / 山田益男 / 山内寿美子 / 八木克道 / 山口泰生 / 吉植よし子 / 吉野康 / 吉野美智子 / 渡辺洋一 / 比嘉良侑 / 森田トミ / 唐木田麻起子 / 斉藤美登里 / 小池直子 / 野田修助・和子

||||||| 新規会員 ('10年12月3日～'11年12月4日) |||

細川哲士 / 吉羽真治 / 倉石昇 / 今関公雄 / 松尾正枝 / 野市猛・富美子 / 本郷登志子 / 田中篤 / 石原和雄 / 籠原明子 / 長野純吉 / 服部泰子 / 若松英輔 / 島美紀子

理事 西田邦明 (立教大学副総長)

監事

理事 前田晃伸 (株式会社ファイナンシャルグループ名誉顧問)